

ステレオタイプの弊害

今井なをみ

- 1．はじめに
- 2．Eのプロセス
 - 2 - 1．1 回目のレポート (4/20)
 - 2 - 2．1 回目の話し合い (4/20)
 - 2 - 3．2 回目の話し合い (5/18)
 - 2 - 4．3 回目の話し合い (5/25)
 - 2 - 5．最終レポート
- 3．結論

1．はじめに

近年日本語教育内では「文化」の扱いに対して、ステレオタイプのな認識、すなわち、集団を類型し画一的に捉えることが、個人間のコミュニケーションを妨げる要因になるという指摘がある¹⁵。

実際、ステレオタイプが弊害となり、コミュニケーションを妨げるとはどのような状況を指し、どのような作用を伴うのだろうか。

本稿の目的は、実際コミュニケーション活動において、集団を類型し、画一的に捉える認識がどのような作用を伴うのかを明らかにするため2001年前期日本語総合5AB¹⁶に参加した学習者のうち、他の学習者に比べ動機のもとめまでに時間がかかっているEのプロセスを時系列で追う。Eが当初テーマとした「日本に働く外国人」とEの専門であった「社会学」というワードに焦点を合わせ、日本語総合5AB(以下NSとする)の

¹⁵ 日本語教育にステレオタイプに対する指摘は細川英雄(2002)「日本語教育におけるステレオタイプと集団類型化」『早稲田大学日本語研究』創刊号に詳しい。

¹⁶ データとして使用したのは早稲田大学日本語教育センター2001年前期日本語総合5ABの記録・変遷である。受講者は17名と大学院生3名、ボランティア4名が参加していた。

ような個と個のコミュニケーションの育成を目指す授業であっても、集団類型化し画一的に捉える認識、すなわち「ステレオタイプ」が活動を阻害する事実を指摘する。そして「日本」「出身国」「外国人」Eのいう「社会学」が要因となってプロセスが停滞する分析・検証する。

尚、引用した発言記録、レポートのうち、下線、記号は筆者によるものであり、文中の検証に用いる。授業参加者はアルファベットにし、うち H は授業者を指す¹⁷。

2．E のプロセス

概要

NS の授業は、個人対個人のコミュニケーション能力育成を目的とした授業である。その授業運営は、「話す・書く・読む・聞く」の4形態を中心に、個々人の考えることを言葉にし、クラスメイトとのインタラクションを通して、自分なりに考えを深め、さらに自分と他者とことばの関係性を捉えなおすよう展開される。¹⁸この授業のキーは主体から出発することである。主体から出発するというのは、自分が着眼した視点に気がつき、対象との関係から具体的にことばで取り出し、対象と自分の関係性によって自らの認識を自覚し、意味づけするプロセスを経る。

E は第1回の動機提出ではタイトルを決められず、第1回目の話し合いでテーマを「日本に働く外国人」に決定し、その理由として「私は外国人」で「日本で働きたい」そのために「日本に働く外国人」にインタビューし、アドバイスを聞きたいと述べる。しかし、E にもクラスメイトにもテーマの何に着目しどのような認識をしているのかわからず、議論にならない。その後も動機のまとめを巡ってクラスメイトや授業者から意見・アドバイスを受けるが、E の発言・レポートは「ききたい」「調べたい」の繰り返しで、動機のまとめができない。だが、H が E の選ぶ仕事に焦点を当て自分の視点に気がつくよう促した結果、混乱しながらも「日本に働く外国人」に興味をもったのが出

¹⁷ 大学院生とボランティアは、話し合いに参加し助言を行うほか、交代で司会の役割を担っている。本稿では、クラスメイトの意見をどのように E のプロセスに反映しているかといった点から記録を扱う。従って、大学院生・ボランティアが司会の役割を担う際には筆者の分析に記載し、それ以外は学習者と同じようにアルファベットで記す。

¹⁸ 個々人の目標は、3ヶ月でレポート完成させることである。その手順は、1 動機の作成 「自分が好きなこと・興味をもっていること」を自分で選定し対象を選ぶ。対象化するよう具体的に、理由、状況を述べる 「自分にとってテーマは何か」を動機のまとめをする。2 「動機のまとめ」を中心に他者とじっくりディスカッションする。3 1、2 との一貫性をもった結論をまとめる。1 2 3 では、提出されたレポートを基に話し合いをしながらレポートを書き進める。

身国であったことが特定され、E のいう「社会学」、「日本で既に働いている外国人」と「E が将来のこと」が引き離され、自分の見ている今の日本へと意識が向く。その結果レポートは、「私の目で見える日本と私」にタイトルを変更し、タイトルと多少ずれてはいるが「生で経験することは私の日本像をつくる」と動機をまとめることができる。それと同時に「社会学に個人的見地」は、文面から削除され、テーマを「私の目で見える日本と私」に変更する。しかし、ここまでのプロセスに時間がかかり、ディスカッションと後半の内容の検討がクラスで十分に行われず、最終的には「日本」「社会学の個人的見地」といった見方は再浮上したまま終結する。

2 - 1 . 1 回目のレポート (4/16)

まず、E は第 1 回レポートの動機を次のように記している。

動機 1 4/16 ??? と私

六年代以降から、大学生は日本へ留学しようと決心して来た。その理由を知っているだろうか。2001年、私たちはその挑戦に応じて、みんながんばっている。日本に住んでいる間に日本語を勉強したり、文化や社会のことについて学んだりして、貴重な、ユニークな経験ができると思っている。だれでも未来のことは予言できないけど、みんな将来の計画と予定を作って、競争心を持っている。ところで、社会学、日本の現代史、日本語の翻訳なども勉強してきたから、日本に住んでいるうちに、ここで得た知識を使って、日本に働いて外人を研究して見たい A と思っている。種々異なった職務の内容、例えば国際貿易会社員やカウンセラーや本職は通訳者やホステスが色々な質問に対して、インタビューを行う予定だ。このレポートの目的は社会学に個人的な見地から B、色々な外人 D の達成する目標と個人的な志望と国際的な視野が持っていることについて意見を聞いてみたい A。

この段階で E はまだタイトルが決めていない。次の話し合いで質問されているように、この時点では E がどのような人を「日本に働く外国人」と認識しているのか不明であり、なぜ E が「社会学の個人的見地」から「日本に働く外国人」を研究したいのかが漠然としている。

2 - 2 . 第 1 回目の話し合い (4/20)

第 1 回の話し合いで E はタイトルを「日本に働く外国人」を決定する。その後の話し合いで E は繰り返し「日本に働く外国人」に「アドバイスを聞きたい」「調べたい」と述べているが、「日本に働く外国人とは何か」を説明できない。クラスメイトには E が「外国人」にこだわっていることは伝わるが、何を指しているのか理解されないまま話がすすみ、議論にならない。

(4/20-1)

E:私も外国人ですから。(E) ()

I: E さんは日本では外国人でしょうね。(全員笑う)日本に来て、考えている事とか、いろいろ(ママ)ことの都合とか、E さんはどうですか? ()

E: 私は日本の方と社会が大好きですが()でも、私の希望はちょっと他の人の聞きたい。(A)

E の発言は、I の質問の意図とずれている。「自分も外国人だ」()という E の発言に対して I は、E の外国人を「日本」ではと限定し、E 自身の経験から E の捉えている日本を引き出そうとする()。だが、E は『他の外国人の考えを聞きたい』と述べる。

「日本、社会が好きだ」という E の発言()は、この後の 3 回の話し合いでも繰り返し述べられるが、その理由は不明である。次のやり取りでも、「外国人の考え方をききたい」「調べたい」と繰り返し紋切り型で応答している。

(4/20-2)

P: ...日本で働いている人のなかで、偉い人もいるしあんまり偉くない人もいるでしょ。考え方が違うでしょ。そのどちらのほうを研究したいですか? ()

E: 外国人の...考え方を... ()

P: そういうんじゃなくて、偉い人と偉くない人と、考え方が違うでしょ? ()

M: そうそうレベルが違うでしょ。ホステスとか外交官とか。()

P: そのどちらの方を研究したいのか、と質問しました。()

E: 私の質問では、どうしてその仕事に就いたのか。社会でいろんなレベルがあるから、色んな perspective があるから....。例えば翻訳をしてる人...色んな point of view? ...A () (略) そう。私は、ホステスにはなりたくない。

P: ああ、わかりました。()

E : わかります？ ()

P : わかりました ()

クラスメイトには、E が「日本に働く外国人」にこだわっていることは伝わっているが、E の言っている「日本に働く外国人」は何かがわからない。P と M は、E の述べる「日本に働く人」に対して職業を基に分類し、E の指し示す外国人を特定していこうとする。() E には、P と M の質問の意図がつかめず、「外国人」で括り応えている。() P も期待する返答がなく、話を切り上げている。() また、E も伝わった確信がもてず確認している。()

(4/20-3)

Y : みんなの意見をきいて 何か考えましたか？

E : (特に何も、という様子) (4/20)

このとき司会をしていたボランティア Y の問いかけのとおり、E は L や P の意見を受け取れなかったようである。「日本に働く外国人」の意味を E 自身が把握しておらず、E は自分と他者の意見との相違が理解できない。5 月 17 日のレポートは、第 1 回と変化がない。

次のレポート (5/17)

・・・このレポートの目的は社会学に個人的な見地 B から、色々な外人 D の達成する目標と個人的な志望と国際的な視野が持っていることについて意見を聞いてみたい。レポートの目的はいろいろな職業 D の必要なことを調査することである。具体的にいえば、そういう 色々な仕事は外国に行って、そこで人を雇おうとしたら、どういう条件で、どういう人を探すか、という問題を調べてみたいと思っている。A・・・(略)・・・ところで、個人的なレベルから見た日本で働いて良い点と悪い点、例えば何を期待しているかや生活に どうやって慣れるやアドバイスなどである。(略)面接させられる人 が色々な仕事をしているので、レポートはさまざまな角度から検討することができる。私は将来日本関係の職業で働くつもりなので、色々な視点や意見を聞きたい A。そして主なものを書いて、外国人のさまざまな場合 D を比較し、説明することができる。(5/17)

E が「社会学」の「見地」から「日本で働く外国人」を研究し、調査したいと言うのはわかるが、なぜ外国人を研究するのか E 自身の問題意識は記述されない。E のいう「社会学に個人的見地」とはどのような視点なのかこの時点では不明である。

E の述べている「外国人」とは、D のように不特定のアドバイスを聞きたい相手と (4/20-1 ()(E)) の発言のとおり「自分」を含み、「外国人」というラベルをつけ「同じ」とであると認識している。E は他から見た自分を外国人というカテゴリーに属した物として認識し、他者との関係性もしくはこの状況と関わりなく固定化している。

2 - 3 . 第 2 回目の話し合い (5/18)

2 回目も「日本に働く外国人」に対して E は繰り返し (4/20-4) の下線 (A) のように「聞きたい」「考えています」と述べている。「E にとって日本に働く外国人は何か」と聞かれると、(C) のように硬化し、応えられない。H は再三テーマを E 自身の問題に絞るよう「仕事」を話題にしようとしている。だが、E は「日本」を巡ることがらから「仕事をする」理由を探ろうとし、E は「日本」に対して「面白い」「興味がある」にとどまり、具体的な対象は述べられない。

(5/18-1)

#J: E さんは、日本に働く外国人についてどう、今、どう思ってるんですか？

#E: 私の場合は、あの、日本関係の仕事、働いているつもりですが、あの、あの、このレポートはいろいろな人の意見をあの聞きたいと思ってます。(A)

#E: あの、すいません、あの、いろいろな外人(D)仕事は、例えば、ホステス、英語教師、あの、貿易会社と翻訳者いろいろな人を面接つもりだから、私はいろいろな意見を聞きたい...。(A)

#J: 日本に働く外国人と私ってありますけど、E さんにとって日本に働く外国人っていうのは何ですか？

#E: あー、ちょっと考えてみます。(C)

#C: 将来、そういう外国人になりたい？(一同笑い)

#E: ... あの一、あの外国人のアドバイスを聞きたい。(A)

E は繰り返し質問を受けるうち、次のように E はレポートを書く理由として「自分の将来を考えることができる」と述べているが、テーマとの関係性が不明瞭で、クラス

メイトには伝わらない。

(5/18-2)

E: 「あの、そして、最近では日本に来て以来、ちょっと心配してるんですが、私の将来はどうしようかなーと思っています。それからこのレポートを書いてちょっとあの考えることができる...。」

H が対象を絞り、日本関係の仕事をしたいと思う理由を尋ねると、E は「興味があるのは、日本語の勉強から日本人、日本の文化・社会が面白いと思った」からと述べる。

(5/18-3)

H : でも、日本関係の仕事をしたいんでしょ？ # E : はい。

H : それはなぜ？

E : 興味があります。 (一同笑い)

H : どんな興味があるの？

E : あの、大学で日本語を勉強をして日本人と日本の文化やあの社会あのとてもおもしろいなと・・・

H : うん、どんな点が面白いの？

E : あ、... (C)

H : だって、みんな日本語勉強してるから、そしたら日本語勉強したっていうのは、全然オリジナリティーでも何でもないでしょ？

E : でも、どうしてみんなは日本語を勉強していますか？

H : それはみんなの問題じゃなくて、E さんの問題。

E は、「日本関係の仕事」に対して「興味がある」と述べ、その理由として、日本語を勉強して知った人・文化・社会を「日本」で括ったまま「面白い」と返答し、(C) のように「日本」のどんな点に着目して「面白い」と認識したのが特定できない。H は、日本語と仕事を区分して考え自分の問題としてテーマを考えるよう促しているが、E は逆に「みんなはなぜ日本語を勉強するのか」と述べ、クラスメイトも日本語を勉強している共通項から自分の問題を特定しようとしている。H から「自分の問題」として捉えて話すよう指摘を受け、E は、次に「日本」を巡って話しを進める。

(5/18-4)

E: 私の場合は、あの、ちょっと（笑）、分かりません。日本にあの、私はイギリスやイタリアといろいろな外国に行ったことがあります、日本はあの、日本はちょっと特別。

H: 何が特別？

E: あー、あの、日本の文化、歴史、社会、あの、あの、具体的に...

H: うん、特別、具体的に？

E: あの、日本人は日本人は日本の、日本の文化はいい点と悪い点があります。# H: うん。

E: でも、全部にもいい点と悪い点がありますが、私はあの日本の、日本人は優しいと思っています。

H: で、その、日本人は優しいから日本で仕事がしたい？（一同笑い）

E: はいそうです。以上です（一同笑い）

H: だから、日本の仕事がしたい、日本で仕事がしたい、なぜ日本で仕事がしたいのか、日本関係の仕事がしたいのか、私はね。私はなぜ日本関係の仕事をしたいのか、それを書かないと、だから、社会学のレポートを書くわけではないから、ここは社会学の教室ではないから、つまり、私はなぜ日本の、日本関係の仕事をしたいのか、たとえば、どういう仕事をしたいのか、それをまずもうちょっと書いていきましょう。

E は日本が E にとって「特別」であることを具体的に言おうと、どの国にも「いい」「悪い」という2 値項があり、日本は「日本人は優しい」という「いい」価値で認識していると述べる。だが、この時点で E は、地理的または国の枠組みから他国と対比して「日本」とし、「特別」と E が認識しているのであって、その「日本」が何かを特定できないのであるから、あくまでも抽象的なことばでしかつながっていかない。H は E の述べたことを整理し「日本人は優しいから日本で仕事をしたいと思っているのか」と問うと、E は応えに窮して話を切り上げている。

H はレポートに書く内容について「外国人」と E のいう「社会学」の視角は捨て、E の仕事に焦点を当てるようアドバイスをし、E は次のレポートで日本語を勉強している理由と過去の自分の学習歴を加筆するが、依然具体性に欠け、動機のまとめもできない。

次のレポート（5/24）

(略) どうして日本語を勉強しているか、私の場合は高校に入ってから日本語が必修科目だが、日本語を勉強すればするほど興味深くて、良い先生が日本語を学ぶことを促進してくれた。そして、日本に大変興味があって、知識を吸収したいという強い意欲を持っているので、長年かけてやる気満々だと思っている。・・・(略) 文化や社会や自分自身について学ぶことができるということおよび、私の意見で、日本人の友だちを作り、勉強をし、楽しむことをしたい。・・・(略) 私は将来日本関係の職業で働くつもりだが、未来のキャリアのために日本へきた。国際な仕事は本当に引っ張りだので、その職業だから競争の激しい世界で、一生懸命勉強しなければならない。(5月24日加筆部、抜粋、それ以外は5/18とほぼ同文)

話し合いでE 本人がレポートで書こうとしているのは、「将来への不安」「仕事をすること」(5/18-2)と述べたにもかかわらず、レポートに反映されずない。

つまり、E は、クラスメイトや授業者からの働きかけを受けても、テーマに選んだ「日本」が他国との対比としての写像であるため、対象として特定することができず、具体的に述べようとしても述べられない。その結果、E は自分の将来について考えたいという問題意識をE は自分の視点をE の言う「社会学」に同定し、「日本に働く外国人」を調査したいと記述するに留まっている。言葉を変えれば、2回の話し合いを経てもレポート、発言が硬化しテーマが何か応えられないのは、「日本」「外国人」では対象化することができず、テーマがE 自身の問題意識の発見を阻止しているからといえるだろう。

2 - 4 . 第3回目の話し合い(5/25)

3回目でも第1回目と同様(4/20 下線(E))のように自分も外国人であることがテーマ選定の理由であると述べている。クラスメイト3名は、E のレポートやこれまでの発言を基にE の意図を汲んで(下記、)述べるが、E は3名の発言を受け取れない、また、(4/20-1,3)(5/18-1)同様E にとって何かと尋ねられても下線(A)(C)のように変わらず堂々廻りである。

(5/25-1)

J:日本に働く外国人は?私にとって、E さんにとって、何なんですか?

E: アドバイスをもらいたい、(A)あとう、私は外国人(E) でいろいろな質問をしてそれからいろいろな意見を聞きたい(A)

#C: あ的那样いう日本で働いている外人は E さんにとって、まあ、自分の将来に何かなる人ですか？

#M: 人の経験。()

#C: そうですね。人の経験を分かるともとうまくいく、一番いい道、自分にとって一番いい道をとれるでしょう。という仮説。()

#Z: 日本に働いている外国人は E さんにとっては大切な人だと思う。なぜかと言うのは外国人同士、外国人の考え方とか、の日本で働いている経験とか、外国人同士の考え方とか、いいところをもらいたい、そのいい経験をもらいたいが仮説です。()

#E: あもう、私の考えは日本、東京、あ、日本が大好きです。具体的にはちょっとできません。何か好きですか？だから私はちょっと雰囲気が大好き、日本に、将来日本にいたいですが、仕事がとちょっとわかりません。あもう、これからいろいろな人に D 質問に対して、とアドバイスをもっています。

()() のように E が日本にいたい理由は「雰囲気が好き」「日本が大好き」だからと述べる。E 本人も述べているように、具体的になぜ日本が好きかを説明しようとしても、具体的に述べることができない()のは、その日本を特定することができないからである。結局 E はいろいろな外国人に質問をし、アドバイスを聞きたい()と述べている。

(5/25-2)

#Y: 例えば、例えばですね。オーストラリアにいたら日本人が親切だと思ってて、日本に来たら親切じゃないがいっぱいいいたとか、もし、そういう経験がありましたら、話してください。

#E: はい、あります。

#E: 私のオーストラリアの前のイメージは、全然知らない、でも全部知りたい、あもう、実際はイメージはだいたい違いますが、でも毎日、珍しい事を経験していますが、あもう...(5/25)

Y がオーストラリアと日本の違いを E の経験を基にして尋ね、それに対して E は具体的には応えられないものの、E が今の日本で経験をすることが「珍しい」と感じ「イメージと違うと感じている」と述べている。つまり「珍しい経験」をすると、以前から思い描いていた「イメージの日本」がパラレルに浮上することを実感しているのだろう。

次の(5/25-3)でEは混乱しながらも、日本に働く外国人という存在に興味をもったのが、オーストラリアと特定する。

(5/25-3)

#E: 日本はいい点と悪い点があります。でも、オーストラリアもいい点と悪い点があります。

#H: うん、例えば、例えば、それはいつ気付いたの？

#E: 外国人はどうして日本に来ました？

#H: いや、そうじゃなくて、Eさんが日本で働く外国人はおもしろい。と思ったのがいつ？

#E: いつ？ #Y: When?

#E: わかる。(一同笑)

#H: 興味があったのが日本に来てからそれともオーストラリアにいた時？

#E: オーストラリアにいたとき。

ここでもEは「日本」と「オーストラリア」を国・地域で対比し、(5/18-4)同様、各国には「いい」点「悪い」点という2値項があり、Eにとって日本は「いい」価値を見出していることを説明しようとしたが、説明できず混乱している。EはHの質問とずれ、「『外国人』はどうして日本に来たのかと、(5/18-1)と同様、問題を特定する際に自分を「外国人」で類型画一化させ、その理由を「外国人」一般から類推して応えようとしている。対象である「外国人」を集団として類型化し画一的に捉えていては、対象と自分の関係が述べられない。

(5/25-4)

#H: なぜ、オーストラリアにいた時、日本で働く外国人について考えてみたいと思ったの？

#E: 私も同じになりたい。あのう、私は将来で日本にいて、働きたい、そこにいる面接されている外人は、同じ役割。

#H: うん、同じ役割。

#E: 同じ、同じの役割、だから私は同じになりたい。

テーマ選定の理由を「将来日本にいたいから働きたい。」と述べている。しかしその

「日本」とは、(5/25-3)で述べている「珍しい経験をしている『日本』」と、(5/25-4)で述べている「オーストラリアで興味をもった『日本』」が区分できず、ここでもEは対象を特定することができない。Eは、日本にいたいから、「日本に働いている外国人は自分と同じ役割になりたい。」だからその人たちに「アドバイスを聞きたい。」と述べている。つまり、Eは「すでに働いて経験のある人」「まだ経験がない自分」といった2項で区分して捉え、日本で働いた経験がある外国人に将来の自分の姿を投影していたことが発言となる。

(5/25-5)

#H: ああ、なりたい。じゃ、だから、なぜ日本で働きたいと思ったの

#E: わかりません。じゃ、先生はどうしてあのう、先生になりたいですか？

#H: 私はそれを話ができますよ。

#E: あのう。

#H: つまり私は何もなりたくなかった。なぜ、働きたくなかったのか話せるよ。

#E: 私は看護婦になりたくない。私は何もなりたくない。()

#H: うん、なりたくない。

「私は何もなりたくない」の発言で、「日本」と「働くこと」とが区分される。そしてEが日本に固執していたのは「仕事をしたい」からではなく、「日本が好きだから日本にいたい」と述べている。その後、授業者の「なぜ」と問いかけで、Eが疑う余地なく「日本で仕事をする」ことが、Eが日本にいたい理由として「いろいろな人と出会い、視野が広がる」と述べる。

(5/25-6)

#H: なぜ日本で働きたいのか。

#E: ただ、職業はちょっと決まっていないですが、あのうもうちょっと考えて、日本で、日本で働きたい。

#H: なぜオーストラリアではたらしきたくなかったのか

#E: オーストラリアだと日本と強い関係、経験？強い関係があるから、それで貿易会社がすごく面白そうと思っています。でも...

#H: なぜ貿易会社が面白そうか、お金持ちになれるから？

#E: はい

#E: なぜお金持ちになりたいの？

#E: お金があったら、海外旅行ができる。いろいろな人が会いたい。私は、私の生活

はちょっと友達でしたが、例えば、K、A ちゃんと J、友達できました、
いろいろな視野が広く。

H：じゃ、それを書けばいいじゃ。

H の問いかけから、E は「いろいろな人と出会い、視野が広がる」と述べ、6月7日のレポートには、E はテーマを「自分の目で日本を見ることと私」に変更する。5月25日に提出されたレポートの内容と比較すると「日本に働く外国人を研究したい。」「いろいろな人にききたい」といった他者へ向けられた関心が、自分の問題として述べられている。さらに、これまでレポートに記していた「社会学の見地」から「調査する」目的、「外国人」を削除し、さらに、E のこれまでの自分の経験と意見を加筆する。

次のレポート（5/25→6/07「自分の目で日本をみることと私」）

変更点・・・日本に働いて外人を研究して見たいと思っている。種々異なった職務の内容、・・・色々な質問に対して、インタビューを行う予定だ。（5/25）→私は社会学関係の科目を勉強したから、日本に住んでいるうちに、ここで得た知識を使って、現代の日本のことと自分の意見を言うことについてである（6/7）・個人的なレベルでは一年間で、大人になっているに違いないので、オーストラリアに帰ってから、新しく広い国際的な視野が持っているに違いない。（5/25）→私の達成する目標と個人的な経験と国際的な視野が持っていることについて書きたい。（6/7）・加筆・・・日本に来て以来、私に影響させることが多い、例えば英語教師のアルバイト、ホステスをした経験およびありふれた出来事のことについて大切だと思っている。全部の経験から自分の新しい意見を作れ、私の人生観が広げるになってきた。この留学することは経験豊かなときに違いない。私にとって、日本でのいろいろな経験、特に自分の観点から見る日本に関係する面、例えば、サブ・カルチャーや暴力的な漫画や新宿のナイト・ライフなどエピソードを調査してことである。自分のレベルから見た現代日本社会の良い点と悪い点、特に、社会の雰囲気と自分の印象を表現する。私にとって生で体験するという事は私自身の!日本像を作る（6/7）

つまり、E が日本の雰囲気が好き、日本が好きと述べていたその「日本」は、具体的な経験からではなく、出身国で、E が他国との対比という関係性出身国でつくった写像である。その「日本」に「特別」「面白い」「興味がある」といった E の価値が「日本語」「日本人」「日本文化」「日本社会」「出身国では働けないと思ったこと」などと絡み

付いたまま抽象化され、表象概念としてのイメージの「日本」となり、固定化していた。その「日本」と E が現在珍しい経験をしているできごととが組み合わせたり、明確に区別できなかった。そのため、自分が認識した対象が特定できず、対象と自分との関係性を問われれば問われるほど、答えられなかった。その結果、虚像の「日本に働く外国人」を外側にあるものとして集団をリサーチインタビューするという「社会学の個人的見地」と、対象としていた「既に日本に働いている外国人」を将来同一の役割になりたい「人」として虚像の「働く外国人」の2つに E の視点を同定し E の問題である E の将来を転嫁したため、現在の自分の視点とテーマ双方が固定化し、プロセスが停滞していた。だが、H が「E が仕事をする」ことに焦点を当て絞るよう推し進めたことで、動機のとめができたといえるだろう。

いずれにしても後半のディスカッションと結論で E が「日本」が特定しなければ、変更したテーマ「自分の目で日本を見ることがと私」に応えることはできないだろう。以上のプロセスを踏まえて最終レポートを検証する。

2 - 5 . 最終レポート

6月8日のレポート完成前の話し合いで E は次のように述べる。

(6/8-1)

#E: あ、最初にわたしのステレオタイプを捨てる、捨てます。それから私の経験から、あ、日本を見ることが、自分で、あの日本のことについてちょっとわかるようになってきました。

#J: (略) 私のステレオタイプは違ったなって経験したのね。その話をしてよ、どういところで変わったのか。その例でいいです。そうするとよくわかる。

「ステレオタイプ」ということばがなぜここで記述されたかは不明であるが、それまでの漠然としていた「日本」を「ステレオタイプ」というカテゴリーを作り、捨象することで、E が今の日本での経験と E の関係性を明示できた。言い換えれば、漠然とした「日本」をステレオタイプという言葉で抽象化することで E が意味している仮に明示した結果、E の今の体験から日本を見ろという立場が定位し、テーマを確定できたといえるだろう。下記のように、E は J のアドバイスを受け入れこれまで持っていたステレオタイプの内容(を動機に書き加える。

最終レポート（7/5）

日本に来る前は、他の外国人と同じようにステレオタイプのイメージがあった。例えば、日本人はまじめで集団的な民族であると言われていた。そのことは少々当たっているところがあったけど、一般的だと思っていた。（中略）私は日本社会の中に、ある種の疑問を感じ、そのことによって日本についてイメージが変わってきた。

それで、まず現在の体験から日本のことを深く理解していきたい。そのことによってこれまで持っていたステレオタイプのイメージを消し去ってきたい。

（中略）自分のステレオタイプを捨てることができてきたので、日本について分かるようになってきたと思っている。これからも、私の今の留学体験からいろいろなことを学びながら、日本人の考え方を理解していきたいと思っている。・・・日本は世界で一番安全な国だといわれている。しかし、暴力やサディズムやマゾヒズムのシーンの多い漫画が簡単に買える。この点で、私は日本社会の中に、ある種の矛盾があるのではないかと考える。私はこれまで日本社会の良い部分や悪い部分を見てきた。特に、その中で、私にとって有意義なことは、サブ・カルチャーや暴力的な漫画や新宿のナイト・ライフなどのエピソードを調査したことである。

（略）・・・彼らによると（筆者注：ディスカッション相手）、「大多数の日本人は二つの顔を持っている。」と言う。具体的には、表面的な観察やステレオタイプの視野から見ると、日本人のイメージはおとなしくて、まじめな国民である。しかし、メンバーのいろいろな体験によると、一つ目の顔は良心的で集団意識が強い国民という顔である。そして、二番目の顔は夜になると出てくる顔である。・私は、自分の体験から日本人が二つの顔を持っていることについて同感するのだが、この意見自体は一般論だと思っている。その理由は、どの社会でも良い点と悪い点があり人々も同様である。自分の体験から、日本の社会の中にはいろいろな顔があると思っている。そして、そこにはサブカルチャーもある。日本にいるうちに自分の体験から結論を引き出し、新しい意見や考え方を自由に取り入れていきたいと思っている。このことは、私にとっても偏見を捨てていくことにつながっている。

（7月5日レポート抜粋）

E が書き加えた今体験している「日本社会」「日本」は、「サブ・カルチャー」「暴力的な漫画」「新宿のナイト・ライフ」である。E が述べるように確かに「体験」（ ）は重要な要素である。E はそのことに気がつき、J のアドバイスを受け入れ、今の時点で

E が意識できる「ステレオタイプ」は何かに答え、これまで漠然と受け取ってきた論()を自分の目で検証することでその情報が正しいのか見極めようとしている()。しかし、ディスカッション相手の意見を一般的だと思っていた()と述べているように、実体のままを自分の目でみようとしてみてもこれまで受け取った不特定の情報によって E の視点を定められていることには変わらない。E の言説をみると、今の目の前で「見た」ことや新しい体験をしていることがらを「日本」とし、「矛盾」や「珍しい」「違う」「疑問」()と感じる瞬間にパラレルに浮上するイメージの日本を「ステレオタイプ」ということばで抽象化し、「捨てる」(6/8-1)「消し去」ろうとしているのであって()、既に受け取った文化論や日本論の出自が出身国で思ったことと特定できても(5/25-3)、「日本人の考え方」「日本社会を分かるようになった」述べていることからわかるように、E が体験から「日本」と認識できることがらも、既に受け取った情報と対比した日本である。このように E が今目の前の日本と自覚する際、照合する判断基準がこれまで漠然と受け取った論によって定められていることやその情報の出自が構成されてきたことを E が自分で考え、特定していくことは骨の折れるプロセスである。

この時点で E が自分の視点を自覚化する可能性があるとするれば、他者の意見からその見解の多様性を知ることから捉え直すことであろうが、ディスカッションの後半部をみると、日本の歌舞伎町の路上ボクシングの光景と日本の漫画をめぐって、相手の意見を記述しており、E が動機のもちである「私の目で見ることとは私の日本像をつくる！」(6 月 7 日のレポート) を、この 3 名の相手と相互に話し合った形跡はない。また、記述からは、E がインタビュー相手の意見に対してその場でどのように述べたかは不明である。E がディスカッションの当事者ではなく、3 名の相手を外側から眺望しているように読取れる。また、このディスカッションから E が考えたことが記載されたのは、抜粋した最終部□のみである。E は相手の発言である「二つの顔の日本人」() に対して E は「一般論」と認識している()のであるから、後半のディスカッション後、状況をクラスで説明することによって捉え返し、動機のもちととのずれを調整していくプロセスを経るよう、クラスでのディスカッションを十分に行い、書き直せば E 本人の視点を自覚化していくことは十分可能であったろう。もしくは、出身国でもったイメージの日本と今ここで E が見ている日本が区別できないのであるから、E 自身が見た光景を「日本」を「今」「ここ」という現在の場で認識し解釈する際の他者の存在、つまり、無自覚である自己の視点を捉えなおすよう働きかけ、自分とは異なる認識と解釈があるという多様性を知りながら、自己の認識を更新もしくは変更するよう働きかける他者との具体的な体験をすることであったと考える。しかし、ディスカッションの記

述が提出された翌週がレポートの締め切りであったため、時間的に間に合わなかったと考えられる。

NS の授業フレームは本人の自己認識と「他者」認識、さらに他者の意見の何を受け取り支援としていくかといった状況判断をも含めて、「私の問題」であるから、本人にとってみれば、「総合的に」困難を極めてしまった。結果的に、最終レポートには E が「日本」で経験していることとして、町の光景を外側から傍観する視点で書き上げており、「社会学に個人の見地」と述べていた集団を外側から調査する視点は再浮上したまま終焉したといえる。

3．結論

以上 NS の参加者のうち E のテーマ設定であった「日本に働く外国人」と E のいう「社会学」に焦点をあてプロセスを時系列で追い、ステレオタイプが要因となり、コミュニケーション活動を阻むことを検証した。

E が当初からテーマを巡ってクラスメイトと見解の相違や、他者の意見を受け取ることができず、再三クラスでのアドバイスや促しを受けても、「私にとってテーマは何か」に E が応えられなかったのは、テーマを対象化できなかったからである。

対象化できないというのは、E の場合「日本に働く外国人」のテーマの内実が虚構であったことが挙げられる。つまり、E のいう「外国人」は、(5/18-2)でのやりとりでわかるように、「非日本人」であり、さらに不特定の虚像(5/17 レポート・話し合いの下線(D))と自分(話し合いの下線(E))を当てはめる集団類型的な画一的な認識によって、E と対象の関係が固定されるため、自分自身の視点双方が同定し、発言も硬化してしまった。

また E のいう「日本」は(5/25-2)のやりとりでわかるように、出身国のアンチテーマとしての地域的枠の写像としての「国」に E 自身の価値が重ねられたイメージの「日本」と、珍しい経験をしている今日の前のできごとが重ねられ明確に区別できなかった。E は最終的にテーマを「自分の目で見る日本」としたが、「日本」に対して当初から情報によって定められていた視点に気がつかず、最終的レポートには、「日本」に対する視点には変化がなく、他者認識において表象もしくは外側から捉えられたまま記載し、終了している。

河野(2001)¹⁹は、「一部の学生は、まずステレオタイプを壊すことによってでしか、自分の職業や専攻や関心の枠から抜け出て、多様な個人を発見することができない。」と指摘しているが、Eの場合も、当初は出身国で知りえた情報や学習してきた「日本語」と自分の将来といった問題が「日本」に絡みつき、その後テーマを変更しても依然情報として受け取った「日本」の視点と、個人の経験から認識し意味づけた「日本」が区別できず、本人の問題として「日本」が特定しきれなかった。さらに、専攻である社会学の集団を類型的に捉える視点を自分の問題を当てはめてしまったことが要因となり、コミュニケーションを妨げていたといえるだろう。

つまり、Eの場合ステレオタイプが弊害となったのは、集団を類型的に画一化する認識が固定的に表象概念のままであり、それらによって既にEの視点が定められていることに自覚化できなかったため、NS フレームと拮抗するようにテーマに応えようとすればするほど混乱し、プロセスのハードルが徐々に高くなってしまった。その結果この授業の時間内には「日本」を巡るEの視点を自覚化ができず、終焉した。

従来日本語教育は日本語の体系からことばを如何に受容させ、運用させるといった側面が強調されてきたように思う。たしかに未知の言語を習得する際に、既成の言葉を受容するプロセスも必要である。と同時に個々人が考えることを出発として具体的な他者と関わりながら自分の考えをより明確にするため、言葉を獲得していくプロセスも必要なのではないだろうか。その際、他者の視点の多様性を知り、自分の視点がどこにあるかを引き出すもしくは認識するよう働きかけることが他者に開いていくと同時に他者と繋ぐキーとなるだろう。いずれにしても授業設計や運営を行う授業者が日本語の教育観や文化観・言語観を実践の場を通して更新し続けることが重要であると考え。

¹⁹河野理恵(2001)「ステレオタイプの強固さ - 『日本事情』教育の現場から - 」『21世紀の「日本事情」』くろしお出版、河野が述べるステレオタイプは、